

教職実践演習における異校種理解を目指した模擬授業評価についての実践報告 —道徳を題材とした指導のあり方を通して—

迫田裕子ⁱ・都島梨沙ⁱⁱ・村上博ⁱⁱ・松井尚子ⁱ・溝口希久生ⁱⁱ

ⁱ 東亜大学 人間科学部 心理臨床・子ども学科 保育幼児教育コース

ⁱⁱ 東亜大学 人間科学部 心理臨床・子ども学科 初等教育コース

yukosakd@toua-u.ac.jp

<要 旨>

本報告は、幼稚園、小学校、中学校、高等学校の教員免許取得を目指す学生が合同で実施した教職実践演習における道徳をテーマとした模擬保育・模擬授業の実践報告である。近年、学校教育現場における多様な課題に対応するため、異校種間連携の重要性が指摘されている。学生が異校種の模擬授業を参観することで、発達段階の異なる対象に対する働きかけのあり方について考える機会とした。学生の模擬保育・模擬授業に対する自由記述評価においては、対象を意識した話し方の重要性や難しさについて気づきを示す記述などが見られた。

キーワード：教職実践演習，異校種，模擬授業，模擬保育，道徳

1. 序論

近年、学校教育現場において、いじめや不登校などの教育課題への対応、国際化や情報化の進展に伴う教育内容や方法の変化への対応、地域への開かれた学校づくりなどが求められており、教員は非常に多様な資質・能力を身につける必要に迫られている。そのため、教員養成段階においても、学校教育現場における現代的な課題に対応できる基礎的な力を身につけることが強く求められていると言える。

教職実践演習は、2010年度入学生から教員免許取得のための必修科目となった比較的新しい科目である。教職実践演習は、文部科学省中央教育審議会（以下では、中教審と表記する）の「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」によれば、「全学年を通じた『学びの軌跡の集大成』として位置づけられるもの」であり、通常、4年次後期に実施される。また、教職実践演習の目的は、同答申によると「将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ること」である。さらには、これによって「教職生活をより円滑にスタートできるようになることが期待」されている。具体的には、中教審の「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」の「教職実践演習（仮称）について」によれば、教職実践演習では、「使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項」「社会性や対人関係能力に関する事項」「幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項」「教科・保育内容等の指導力に関する事項」の4つの事項を含むことが適切とされ、模擬授業やロールプレイ等を取り入れることなど、具体的な授業内容例も示されている。これらを踏まえ、各教員養成校では、さまざまな手法を取り入れながら、必要な事項を身につけさせるために教職実践演習が実施されている。

教職実践演習は、学校教育現場において求められる基礎的な資質・能力を学生に定着されることを目指すものであり、コミュニケーション力や学級経営力、学習指導力などの基礎的な力はもちろんのこと、現代的な課題についても理

解を深め、必要な技能習得の必要性に気づかせることが重要であると考えられる。前述したように、現代的な課題は数多く挙げられるが、近年大きな転換がなされたこととして道徳の教科化がある。平成27年3月に小中学校の学習指導要領等が一部改正され、「道徳の時間」は「特別な教科 道徳」に変更になった。すなわち、学校教育において道徳教育の重要性は増しており、教員養成段階で道徳意識や人権意識を高める教育に関連する力を身につけることは、これまでよりもさらに強く求められると考えられる。また、文部科学省は「人権教育の指導方法等の在り方について〔第三次とりまとめ〕実践編」において、人権教育の指導に関して、異なる校種の学校間で、子どもの育ちと学びをつなぐことの重要性を指摘している。具体的には、各園・所、学校が連携して、授業研究や全体計画・年間指導計画等の検討することなどから、指導内容の重複の調整、指導方法の改善、教職員の指導技術の向上が期待されることを示している。こうした異校種間の連携が求められる状況を踏まえると、教員養成段階において、他の校種の授業実践の在り方を知っておくことは有用であると考えられる。通常の講義等では校種間連携の重要性までは触れられていても、時間的制約等から具体的な授業や活動まで取り組むのは難しいのが実情であろう。しかしながら、教職実践演習は、すべての校種の免許を取得する学生が必ず受講する科目であり、模擬保育・模擬授業の実施が具体的活動として取り入れられる。その中において、異校種の免許取得を希望する学生が合同で模擬保育・模擬授業の時間に取り組むことで、異校種の授業や活動の一部を知ることが可能となる。そこで本研究は、教職実践演習において幼稚園、小学校、中学校、高等学校の免許取得のために学ぶ学生を集め、道徳に関連するテーマで模擬保育・模擬授業を実施した実践について報告し、その意義と課題について考察を行う。

2. 教職実践演習における実践報告

2. 1. 方法

(1) 実践時期

2017年10月4日、11日、18日の3回で実施された教職実践演習の時間（1回あたり90分）。なお、この3回は、教職実践演習で実施する15回のうちの一部である。教職実践演習の担当教員は、幼稚園の担当教員1名、小学校の担当教員2名、中学校・高等学校の担当教員2名である。本実践においては、これら4名の教員が全員参加した。

(2) 対象者

T大学において教職実践演習を受講する4年生及び科目等履修生の合計34名を対象とした。内訳は、幼稚園・小学校教諭免許取得を主に目指す初等教育あるいは心理学に関連するコース所属の学生7名（男性4名、女性3名）、美術系の学科に所属し中学校・高等学校の美術・工芸の免許取得を目指す学生2名（男性2名）、スポーツ系の学科に所属し中学校・高等学校の保健体育免許取得を目指す学生21名（男性16名、女性5名）、幼稚園免許取得を目指す科目等履修生1名（男性1名）、中学校・高等学校の保健体育免許取得を目指す科目等履修生3名（男性3名）である。

(3) 実践方法

第1回（10月4日）：教職実践演習の担当をする複数の教員のうち、校長経験者である実務家教員1名により、小学校における道徳の授業に関する複数の模擬授業のデモンストレーションと「主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）を求めて」に関する指導が行われた。

さらに、学生は校種別のグループ分けを行い、提示されたテーマの例（表1）のうちいずれを用いて模擬保育・模擬授業を行うか、グループごとに検討を行った。なお、グループは、幼稚園1グループ、小学校1グループ、中学校1グループ、高等学校2グループの計5グループに分かれた。幼稚園においては、道徳性の芽生えを培うための指導、小学校、中学校においては道徳の時間、あるいは特別活動の時間、高等学校においてはロングホームルーム（LHR）

の時間をそれぞれ想定して指導案を考えることとした。

第2回（10月11日）：グループごとに、選択したテーマに基づき模擬授業の指導案を作成し、模擬授業実施者を決定した。模擬保育・模擬授業の指導案作成においては、原則、学生同士のグループ内での話し合いを優先したが、話し合いが滞っているグループについては、教員が助言や発言の促しをするなどして、指導を行った。

第3回（10月18日）：グループ代表者が模擬保育・模擬授業を実施した。なお、時間の関係上、各グループの模擬保育・模擬授業は導入から15分までの内容で実施することとした。各模擬授業について、グループの代表者1名が授業者となり、授業を行った（1グループのみ、板書を書く補佐役がついたが、授業進行は別の1名が代表者として行った）。授業者以外の学生は子ども役として授業を受けた。さらに、各模擬保育・模擬授業終了後に、子ども役はそれぞれ模擬保育・模擬授業についての評定用紙に記入を行った。授業者は、自分の実施した授業については、同様の項目で自己評価を行った。

(4) 評定用紙の項目

各グループの模擬保育・模擬授業後に実施した、授業評価のための評定用紙は、「1. 全くそう思わない」から「5. 非常にそう思う」の5段階で評定する10項目の質問項目（表2）と、自由記述欄で構成された。質問項目については、教職実践演習を担当する教員間で意見を出し、作成を行った。なお、これらの質問項目については、授業を評価する視点がある程度方向づけ、学生が漫然と授業を受けないようにする意識づけの意味合いが強いため、本報告ではその量的なデータについての結果は取り上げず、自由記述の結果を中心に考察を行う。

表1 模擬保育・模擬授業のテーマ例

思いやりについて
働くことの大切さについて
互いを認め合い、支えあう学級づくりについて
家庭学習の大切さについて
きまりを守ることの大切さについて
挨拶の大切さについて
ボランティア活動の意義について
命の大切さについて
夢をもつことの大切さについて
友だちの大切さについて
家族の大切さについて
学ぶことの大切さについて
ふるさとの大切さについて
いじめについて
基本的な生活習慣の大切さについて

表2 模擬保育・模擬授業の評価項目

-
- (1) 本時の目標を具体的に設定できた。
 - (2) 導入段階で本時に学習することに関心を持たせることができた。
 - (3) 聞き取りやすい話し方ができた。
 - (4) 指導内容に応じて適切な教材を用いることができた。
 - (5) 保育・学習活動に関する指示が明確であった。
 - (6) 発達段階に応じた働きかけができた。
 - (7) 幼児児童生徒の理解に応じて発問ができた。
 - (8) 板書を適切に行った（幼稚園の模擬保育は除く）
 - (9) 適切なペースで授業を進めた。
 - (10) 幼児児童生徒が積極的に活動・学習に取り組んでいた。
-

2. 2. 実践報告

2. 2. 1. 模擬保育・模擬授業の内容

(1) A グループ（幼稚園の道徳性の芽生えを培うための指導）

テーマである「きまりを守ることの大切さについて」に基づき、幼稚園における保育場面を想定した模擬保育が行われた。ねらいは、「きまり（ルール）を知り、守ろうとする」であった。外遊びの前という場面設定であり、決まりを守ることを幼児に考えさせる働きかけである。まず、どのような決まりがあるかについて幼児に尋ねながら、「順番を守らない」「玩具を取り合う」などのイラストを見せ、どこがいけないかを確認するという形式で行われた。

(2) B グループ（小学校の道徳の時間）

テーマである「相手の気持ちになって考えよう」に基づき、小学校における道徳の時間を想定した模擬授業が行われた。このグループは授業者に加え、板書を書く補助役がついた。ねらいは、「児童一人一人が思いやりの心を持ち、他者を積極的に助けようとする気持ちを育てる」であった。まず、友達にされたり、言われたりしてうれしかったエピソードを何名かの

児童役の学生から引き出し、その内容を板書した。その後、荷物を運ぶ仕事を押し付けられている主人公の4コマ漫画を見せ、主人公がどのような気持ちを持っているか考えさせる活動をグループに分けて行わせた。

(3) C グループ（中学校の道徳の時間）

テーマである「夢を持つことの大切さ」に基づき、中学校における道徳の時間を想定した模擬授業が行われた。今もっている夢を数名の生徒役の学生から引き出し、その後、自分の夢についての将来設計を年表に書き込む活動が行われた。授業者は、導入の際、生徒役の学生に対して、自分は異なる科目の教員になりたかったという自己開示を行い、その後、生徒役の学生に自分の夢を考えさせた。

(4) D グループ（高等学校のLHRにおける道徳的活動）

テーマである「思いやりとは」に基づき、高等学校におけるLHRでの道徳的活動を想定した模擬授業が行われた。Aグループの活動と類似したマナー違反場面のイラストを複数提示し、どのような場面であるかを生徒役の学生に尋ね、回答させた。そこから、「思いやりとは相手のことを考えて行動することであるが、自分を犠牲にしてまで相手のことを考えて行動することは思いやりと考えてよいのか」という質問を生徒役の学生に投げかけた。その後、グループでその質問について討論するという形式であった。

(5) E グループ（高等学校のLHRにおける道徳的活動）

テーマである「命の大切さについて」に基づき、高等学校におけるLHRでの道徳的活動を想定した模擬授業が行われた。副題として、「自分の人生について」が示されており、人生設計を生徒役の学生に配付し、10代から60代までの人生設計を個別に書かせる活動が行われた。授業者は、黒板に自分の人生設計を例として書き、示した。

2. 2. 2. 模擬保育・模擬授業に対する学生の評価（自由記述データ）

それぞれの模擬保育・模擬授業について、学生が示した自由記述の内容は以下の通りである。

(1) Aグループについての評価

Aグループについての自由記述の内容は、大きく分けて、『幼児に合った言葉づかいの難しさ』『イラストの有用性』『幼児に受け入れられやすい話し方』『子どもが反応しやすい言葉かけや対応』『声の大きさ』『時間配分の課題』に関する内容であった。幼児にとっては難しい用語で説明する場面があり、保育者役の自己評価においても、「言葉づかいが難しかった」との記述があった。『イラストの有用性』に関しては、絵カードを用いることにより、幼児が理解しやすいと評価された。『幼児に受け入れられやすい話し方』においては、「口調がやさしくゆっくり」といった点が評価された。『子どもが反応しやすい言葉かけや対応』については、幼児役の学生が質問に対してスムーズに反応しなかった場面で、すぐに次の発問に進んでしまった点を指摘し、「もっといろいろな人に当てる」などが必要との指摘をする記述もあった。『声の大きさ』『時間配分の課題』については、声が後ろまで届いていなかったこと、時間配分の工夫が必要と感じたことの記述が示された。

(2) Bグループについての評価

Bグループについての自由記述の内容は、大きく分けて、『板書の書き方』『聞き取りやすい声、話し方』『児童への質問や対応の良さ』『教材・教具の活用』『時間配分の課題』に関する内容であった。『板書の書き方』については、「めあてを囲む方がよい」「文字が薄い」「誤字」を指摘する記述が見られた。『聞き取りやすい声、話し方』では、「聞き取りやすい」や「アクション、リアクションが豊かで適度にフランク」などの記述が見られた。『児童への質問や対応の良さ』では、「児童への質問の仕方が丁寧」「子どもに対しての対応がとてもよかった」などの記述が見られた。『教材・教具の活用』については、4コママンガを題材にしたこと、グルー

プワークでそれらを活用したことについての良さの記述が見られた。『時間配分の課題』については、授業者が授業を行ったうえで、グループワークの時間が多くなるため、2時間に分けて実行するべきだったとの反省が示された。

(3) Cグループについての評価

Cグループについての自由記述の内容は、大きく分けて、『生徒とのコミュニケーション』『テーマやねらいと活動とのつながりの不明瞭さ』『声の大きさ、聞き取りやすさ』『教員の自己開示の効果』『資料の作り方や提示の仕方』に関する内容であった。『生徒とのコミュニケーション』については、「生徒とちゃんとコミュニケーションをとって授業を進めていた」「授業を通して接しやすそうな印象がもてた」「一人ひとりの書いているところに行き、コメントを言うのは良かった」などのポジティブな評価と、生徒の回答に対する投げかけの言葉の一部について、「生徒との信頼関係ができていればよいが、人によっては傷つくかもしれない」というネガティブな評価の両方が示された。『テーマやねらいと活動とのつながりの不明瞭さ』については、夢を持つことの大切さから人生計画表の作成までのつながりが授業者から提示されなかったことから、「人生計画表を作成した後、どのように展開されるのかわからなかったし、主題内容との関係がわからない」とする記述が見られた。授業者の自己評価においても、「本字のねらいが設定できなかったので進行が定まらなかったと感じた」との記述が見られた。『声の大きさ、聞き取りやすさ』については、「声が大きくて聞き取りやすかった」などの記述が見られた。『教員の自己開示の効果』については、「先生がなりたかった夢を話していたので、話に入りやすかった」などの記述が見られた。『資料の作り方や提示の仕方』については、「配付物の（図の）枠がそろっていない」「資料に入るのが早かった。もう少し説明があったらよかった。」などの記述が見られた。

(4) Dグループについての評価

Dグループについての自由記述の内容は、大

大きく分けて、『生徒とのコミュニケーション』『指示の不明瞭』『イラスト』『発達段階に合わない働きかけ』に関する内容であった。『生徒とのコミュニケーション』については、「(イラストごとに) 丁寧に説明や質問があって良い」「生徒への発問の仕方が良かった」というポジティブな評価と、生徒からの回答がなかった場合にそのまま授業を進めてしまった点についてのネガティブな評価が見られた。『イラスト』は、全体に見せるにはサイズが小さく見えづらかったことの指摘であった。『発達段階に合わない働きかけ』については、「導入部部分は小学生向けのような感じがした」「話し方がとところどころ高校生向けじゃない」といった、話し方や働きかけ方が対象となるはずの高校生に適したものと受け取られなかったことが指摘された。また、「高校生を相手にした授業であれば、関心を持たないと誰も発言しない暗い授業になると思う」というように、発言を促すために生徒役の注意や関心をより引き付けるような働きかけを求める記述も見られた。

(5) Eグループについての評価

Eグループについての自由記述の内容は、大きく分けて、『テーマの不明瞭さ』『生徒の活動』『声の明瞭さ』『ワークシート』に関する内容であった。『テーマの不明瞭さ』については、「何がしたいのか良く分からなかった」「命の大切さと人生の道のりがどうつながっているのか分からなかった」など、取り上げたいテーマと活動がうまくつながらない印象についての記述がみられた。しかしながら、「高校1年生に対してとても面白い題材だと思った」といった記述も見られ、題材そのものについての評価はポジティブなものも見られた。『生徒の活動』については、「人生計画を生徒に発表させることにより授業にも活気がわいていたと思った」「(書かせる年代ごとに) 生徒とコミュニケーションをとりながら進めていたことが良かった」「自分の人生について考えさせられたので良かった」など、活気ある活動になっていたことが評価されていた。『声の明瞭さ』については、「はきはきと話していて、聞き取りやすかった」という記述がみられた。『ワークシート』

については、「ワークシートが見やすく良かった」などの記述がみられた。

3. 総合考察

3. 1. 実践の意義

本論文は、教職実践演習において、幼稚園、小学校、中学校、高等学校の教員免許取得を目指す学生に道徳を題材とした模擬保育・模擬授業を実施させ、異なる校種の授業についても参観させた実践についての報告である。学生の授業に対する評価については、自由記述の内容によると概ね類似した観点によるものが見られた。例えば、声の明瞭さや子どもとのコミュニケーションの取り方、教材・教具については、いずれの校種の模擬保育・模擬授業に対しても、記載がみられた。しかしながら、同じ子どもとのコミュニケーションであっても、例えば、幼児教育場面での分かりやすい話し方と高校生を対象とした場合の話し方では大きく異なる。これについて、両者を比較する記述こそなかったものの、対象を意識した話し方の重要性や難しさについて気づきを示す記述がAグループ(幼稚園)とDグループ(高等学校)に対する評定用紙で見られた。また、偶然ではあるが、Aグループ(幼稚園)とDグループ(高等学校)はともにマナー違反に関するイラストを用いて、活動を行った。同じマナー違反の教材を用いていても、Aグループ(幼稚園)は規則を守ることを意識づける内容であるが、Dグループ(高等学校)では、規則を守るだけでなく、思いやりとは何か、自己犠牲が含まれる思いやりについてどう考えるかをテーマとしていた。このように、発達段階に応じたテーマの選択と、テーマのつながりについて模擬授業を通して見ることができたことは、子どもの育ちと学びをつなぐことを具体的に知る機会の一つとなったと考えられる。また、発達段階の個人差が大きいことを考えれば、異なる校種の子どもへの働きかけの方法について知ることは、自らが目指す校種においても役立つ知識であると考えられる。例えば、中学校や高等学校においてもより具体的でかつ視覚的な刺激を用いることで理解が促進される生徒が

いる場合に、小学校で行われている授業実践の方法の一部が応用できる可能性がある。本実践のような異校種の模擬授業を見ることは、具体的な働きかけの例を知る機会となったと言える。

3. 2. 今後の課題

本実践では、模擬保育・模擬授業において幼稚園、小学校、中学校、高等学校の教員免許取得を目指す学生がそれぞれの校種の授業の例を参観するという目的は達成したが、異校種連携をより意識させるための授業者からの働きかけは十分なものではなかった。指導内容の校種間のつながりやテーマの全体的な目標を意識させるためには、グループごとにテーマを決めさせるのではなく、すべてのグループで同じテーマでの授業を組み立てさせることがより有効な方法であるかもしれない。また、時間的制約のため振り返りの時間が十分に取れたとは言いがたいことも、本実践の限界といえる。今後は、振り返りのための時間を十分に確保し、かつ、各校種間でどのようなつながりを持たせることが可能であるかなどを検討し、より異校種連携を意識した形へ変えることが必要になるだろう。

引用文献

文部科学省 2006 「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」中央教育審議会

文部科学省 2008 「人権教育の指導方法等の在り方について〔第三次とりまとめ〕 実践編」

